核兵器のある世界に立ち向かうために――知識と皮肉を携えて

高橋秀実

核兵器は地球を守れるか？ これほど答えに窮する必要がない問いはほかにない。私にはこの質問が「今世界は平和か？」という質問と同義に映る。明らかに答えはノーである。ロシアのウクライナへの侵略を見れば一目瞭然だ。長らくフィクションの題材として扱われてきた核戦争による第三次世界大戦が、まったくのフィクションである可能性が日毎低くなり、正義とは何か、歴史とは何かという哲学的な問いが日々首をもたげる。人々はこの現実を見て、核の傘、核の抑止力という神話に踊らされてきた過去に苦笑――あるいは目を丸くして口を塞がざるをえないだろう。

G7 広島サミットでカナダのトルドー首相が原爆資料館を訪問し、その後再訪したというニュースにバンクーバー在住のミズナがソーシャルメディアで絵文字の拍手を送っていた。私は 2023 年の 3 月までバンクーバーに留学していて、彼女は私がよく行く古本屋の店員だった。彼女は日系フィリピン人で、日本語は書けないものの少し喋ることはでき、私たちの会話は英語と日本語が混ざり合うものだった。ミズナは気候変動に関心を持ち、週に一度しかお肉を食べないライフスタイルで生きていた。どれだけ日本の食事が健康的かつおいしいかを教えてくれたあとには、畜産と酪農がもたらす環境破壊について語り、バンクーバーにいるアジア系民族の多彩さを教えてくれたあとには、異常なほど少ないアフリカンアメリカンの原因についても語ってくれた。もちろんその会話の主題は最近読んでおもしろかった本というカジュアルな話題だったり、おしゃれなベーカリー、カフェ、ベトナミーズレストランだったりするのだが、折に触れて彼女は話を脱線させ、ロシアによる侵略戦争に対する批判から政治への不満、移民やファーストネーションに対する扱いの不当さを述べ、私は正直、話の本道より脇道に興味が湧いた。ロシアが核兵器を使うのではないかという憶測が叫ばれたころ、彼女はまるでノーベルみたいな気分になると言った。最初は土木工事用に開発したダイナマイトが兵器として利用されるようになってノーベルが思い悩んだのと同じく、核分裂・核融合を発見し、爆弾に転用された人間は今どんな顔をして過ごしているのだろうと。別の用途で使われるべき技術が結局は軍用に使われ、発展していく様を見るのはどんな気分なのだろうと。おもしろいよね、とミズナはカフェで抹茶ラテを啜りながら皮肉まじりに微笑む。一方にはプーチンがいつ放つかわからない核兵器があって、一方では欧米が進める核融合発電が投資先として話題になってる。原子力発電よりも安全で、環境にも優しい、究極の発電とか夢の発電って言われてるんだもん。目尻には皺が寄っていたが、彼女の瞳は虚ろで、遠くの方を向いていたのをよく覚えている。爆弾になるのは発電技術を確立する上で寄りたくなる道だったのかもしれない。芝生を育てるスプリンクラーに、小さな子供が駆け寄ってきて水遊びをはじめてしまうみたいに、本来の目的が幼稚な欲求によって遮られてしまったのかもしれない。でも子供の近くには親がいるべきだと私は思う。聞いた話がある。ナチス・ドイツの技術者は、ヒトラーに核爆弾を持たせたら世界が破滅すると踏

んで、あえて原子爆弾の開発を遅らせ、わざとことごとく失敗させたという。嘘か真かわからないが、少なくともナチス・ドイツが原子爆弾を持っていなかったのは事実で、つまりヒトラーの近くにはちゃんと親がいたのだ。

率直なところ、核融合発電に関する知識はなく、いつだって古書で培ったミズナが教鞭を執り、私は机に向かう生徒だった。彼女と話をしていると、まるで自分たちの意見がいずれ世界を変えるんじゃないかという気になった。混沌とした話がつづいても、最後には希望と笑顔が私たちを包んだ。しかし日本に帰国すれば、隣からミズナは消え、愛くるしい皮肉混じりの会話はなくなり、陽が最も早く沈む元先進国に絶望する毎日だけが残った。だからこそ、ソーシャルメディアで彼女がトルドー首相に拍手を送ったとき、私は生き返る思いだった。日本がアジア人だからアメリカは原子爆弾を落としたんだ。相手が白人だったら落としてないよ、という言説を彼女はかつて唱えた。ロシアはわかんないけど。そう付け加えて。むろん、彼女の言うことすべてを鵜呑みにするつもりはない。彼女のおかげで、私も洋書を読み、図書館にも通うようになった。私たちにできることは限られている。しかし知識を深めることには限度はない。それが核兵器に対する考え方、あるいは世界全体に対する考え方の一部になってくれる。私の武器は本だ、ミズナがそうであったように。核ではなく、地球を守るのは知識だと私は思う。

字数：1922